

2014年7月14日

日本サウンドスケープ協会

会員の皆さま

理事長 鳥越けい子

## 協会設立20周年記念展示をめぐる問題について

日本サウンドスケープ協会は昨年（2013年10/5-12/1）、千葉県立中央博物館（第2企画展示室）を会場に、20周年展「音風景の地平をさぐる」を開催しました。この記念展を通じ、設立から今日に至る協会の歩みとその活動内容を紹介し、現代社会において「サウンドスケープ」という考え方がもつ意義を広く発信することができたことは、協会ホームページの「20周年展の総括」において既に報告した通りです。しかし、本展示会で取り上げた「震災プロジェクト」のひとつ「福島サウンドスケープ」のパネル文章をめぐる深刻な問題が起こり、皆さまにさまざまなご心配をおかけしました。そのため、ここにその経緯を報告すると共に、今回の問題に対する私の見解等を述べさせていただきます。

本記念展はもともと、千葉県立中央博物館生態学・環境研究科長（展示会開催当時）の大庭照代さん（本協会常務理事）により、博物館による企画展「音の風景—うつりゆく自然と環境を未来に伝える—」との同時開催の共催事業として提案されたものでした。2012年度に準備会がとりまとめた展示コンテンツの概要を、2013年度総会で「設立20周年」を記念する主たる事業のひとつとして承認した後、委員長の船場ひさおさん（本協会常務理事）を含む7名の会員から成る「20周年展実行委員会」を通じて、その準備と実施に当りました。

そうしたなか、「福島サウンドスケープ」についての解説パネル文章に関し、開催直前に問題が発生しました。それは、パネル素材提供者の永幡幸司さん（当時本協会常務理事）による当初の説明文が、福島大学構内の放射能除染が遅れているのには大学執行部に責任の一端があることを示唆していたため、その部分に対して千葉博から、大学批判と取られるので博物館における展示にふさわしくないとして、表現変更の要請があった、ということです。

要請を受けた20周年実行委員会は、永幡さんに変更の可能性を打診し、永幡さんがそれを拒否したため、その意向を踏まえ実行委員会は千葉博に要請には応じられない旨の回答をしました。それに対し千葉博が、変更できないなら当該文言を削除するよう要求したため、実行委員会は、永幡さんに文言変更で妥協できないか、と改めて問い合わせたところ、永幡さんは条件付きでそれに応諾しました。

その条件とは、千葉博の措置は「言論統制」であり「検閲」であるとして、個人の

資格で千葉博に対し抗議する、またその抗議の一環として、彼としては20周年展の開催中は千葉博の敷地に足を踏み入れない(千葉博での活動をすべてボイコットする)というものでした。私としては、個人的に翻意への説得を試みたものの永幡さんは受け付けず、実行委員会としては異論をはさめるものではありませんでした。このとき、永幡さんは実行委員会等にメールを送り、文言の訂正に同意し、変更された文言を了承し、実行委員会の労に謝意を表し、さらに協会のML上で実行委員たちを非難する気のないことを表明しました。

私は、協会としてはその時点(その限り)においては、何ら問題を生じなかったと思います。しかし、永幡さんの見解表明に応じて、一部の会員から、協会の姿勢を明らかにせよ、という書き込みがML上になされた後、ML上でその会員たちと事務局長との間で激しいやりとりがあり、そうした事態に対して私もまた、何度か状況説明等のメッセージを発信せざるをえませんでした。

一方、永幡さんは千葉博だけでなく、千葉県庁に対しても抗議を続け、新聞等のメディアでもその主張が取り上げられました。千葉博としては、協会が文言の変更に同意した、という事実をもって永幡さんの抗議には根拠がないとして、協会の見解を問うてきました。そのため協会(実行委員会)は、共催者である千葉博の意向に対して誠実に対応するのは当然であり、共催者間の調整作業のなかで文言の調整を行ったという見解を表明することになりました。しかしその見解は、彼の受け入れるところではありませんでした。

こうしたなか、私たち(理事長をはじめ、実行委員長を含む常務理事たち)は当初より、何よりも先ず永幡さんと会って話し合いたいと考えていました。先ず10月初めの段階で、善後策を協議しようという面会を求めましたが、彼はそれに応じることはありませんでした。

永幡さんは「協会の正式見解」を求めるメールを常務理事に送り、その回答を要求しましたが、協会の見解をまとめるためには、少なくとも常務理事会で議論しなければなりません。2013年12月に定例の常務理事会を開催すべく、開催日の日程調整をはかると、永幡さんからは「呼びつける前に質問に答えろ」とのメールが届き、常務理事会への参加をボイコットされました。結局、永幡さん欠席のまま常務理事会を開き、協会としての見解をまとめざるをえなかったのは残念なことでした。

今年5月に入ってから、理事会や総会に向けて何らかの説明をしてもらおうと、面会を呼びかけましたが、永幡さんはそれに応じることなく、総会直前に協会の運営姿勢を非難する文章を協会ML上にアップし、協会を退会されました。

以上が今回の問題のおおまかな経緯で、以下はそれに対する私の見解です。

## 1. 千葉博からの要求について

千葉博が展示の内容と文言を事前にチェックするのは、差別、セクハラ、個人情報漏えいなどが含まれる可能性がありますから当然です。永幡さんの「言論統制」「検閲」という批判は、憲法21条にうたわれる基本的人権のひとつである「言論の自由

の侵害」に該当しますが、ただしその権利は、「公共の福祉」によって制限を受けます。その兼ね合いの部分で今回の問題が起こったわけです。

ここでひとつ検討すべきは、永幡さんが起案した当初の文言が、展示にふさわしくないというほど「公共の福祉」に反するかどうかです。千葉博の要求、および永幡さんの反発については実行委員会内にもさまざまな意見があったという事実があります。この点は相当微妙な問題を含み、千葉博の要求が過剰な自己防衛ではないか、という見解もありえますから、もし実行委員会の構成メンバーが違っていたら、千葉博の要求に対する反応も異なっていた可能性があります。

しかし協会の運営は、基本的に各委員会の自主性を尊重していますから、今回の件においても実行委員会の方針を協会の方針として第1次的に認めることとなります。実際、永幡さんは昨年度は「学術運営委員会」の委員長でもあり、彼は20周年記念事業の一連の事案で2013年11月16日午後の研究発表会の一部として予定されていた「スペシャルセッション」等を直前になってキャンセルしました。協会としては、対外的に責任を欠く事態になったわけですが、その場合にも運営委員長の意向を尊重してその内容を変更した次第です。

## 2. 永幡氏の抗議行動の正当性について

永幡さんは、千葉博の要求を人権の侵害であると主張し、さらに文言の変更は著作権の侵害であるとして、抗議行動を繰り返したのですが、この正当性には主に次の2点において疑義をはさむ余地を残します。

- 1) 永幡さんが提出した資料は、協会が20周年を記念して展示するものであり、展示資料の内容については実行委員会が責任をもって決定することになっていました。よって、永幡さん（彼に限らずすべての資料提供者）はその展示に対して資料を提供するにすぎないというのが、今回の展示に関する協会の基本的な考え方です。つまり、千葉博が変更を要求したのは、永幡さんに対してではなく、実行委員会に対してであったのです。常務理事である永幡さんは、このことを十分に知っていたはずで。
- 2) それにもかかわらず、実行委員会は、変更に関して永幡さんの見解を求めました。これは手続き上必ずしも必要ないものでしたが、実行委員会としては資料提供者の意向を尊重する趣旨から、他の提供者に対してもほぼそれを行っていました。しかし、永幡さんへの連絡においては特に、彼が常務理事でありかつ「震災プロジェクト」の代表だったという理由もありました。

永幡さんはそれに対して、上述のような経緯をもって変更に同意しました。仮定の話ですが、ここで永幡さんが同意していなかったなら、実行委員会としても千葉博への対応が違っていたと考えることができます。つまり永幡さんが同意したという事実が、その後の実行委員会のとった措置を決定的に支配しました。文言変更同意した時点で、永幡さんは著作権や人権についてその侵害を訴える資格も失ったと考えられます。永幡さんが個人の資格で、千葉博に抗議するのは自由ですが、「言いつばなし」の抗議が精いっぱいだった、と思いま

す。なぜなら抗議をし続けると、関係者から文言変更の同意の事実をもって反論されるからです。永幡さんはまた、自身の同意は協会の立場を考えた一時的なものであった、と後に弁明されましたが、これは組織として動く実行委員会、さらには協会としては受け入れられるものではありませんでした。

### 3. 常務理事としての永幡氏の責任について

永幡さんは、8人いる常務理事の1人でした。常務理事会は、協会の運営を第1次的に担っている組織で、何か問題が起こったなら常にその解決にあたるべき立場にあります。ところが、この問題に関する限り、永幡さんは常務理事としての立場を踏まえた発言をしたことがありませんでした。あたかも一般会員か非会員であるかのような抗議文を書いていたように思いました。私は、この点について大いに疑問を抱きました。常務理事をはじめ、協会の仕事を担っている会員は、無報酬で協会に奉仕しています。協会役員の中でもとりわけ常務理事は、会費を払う協会員からの付託を受けて、協会の運営に常に携わっているわけですから、それなりの責任があります。永幡さんが協会の運営に問題があると思うなら、まずは常務理事会において協議してほしかったと思います。

永幡さんが抗議を展開している間に、協会活動には大きな支障が生じました。それが常務理事によって引き起こされたということを見ると、会員の皆様に対して申し訳ない気持ちでいっぱいです。残念なことは、その点について永幡さんからは何の言及もされていないということです。その間、常務理事であることの自覚を促す発言が永幡さんに届いていました。しかし彼は、最後に退会の辞を協会 ML 上にアップした際、人権を守らぬ人々に運営されている組織に所属したくない、という趣旨の言葉を残しました。永幡さんが最後まで、自分も運営の責任を負っていたことを自覚していなかった、あるいは私たちに対しても敢えてそれを無視したことはまことに遺憾です。

### 4. 協会運営について

常務理事会の当時のメンバーは、私と永幡さんの他、船場さん（20周年展実行委員長）、大庭さん（昨年度まで千葉博職員）、佐藤宏さん（事務局長）、川崎義博さん、川井敬二さん、土田義郎さんでした。今回の問題においては、その震源にいる永幡さんが常務理事でしたので、常務理事会そのものの運営に細かい注意を払わねばならず、その運営を難しく感じることも多々ありました。また、永幡さんが委員長を務めていた学術運営委員会は、理事長が委員長と連絡をとれなくなった昨年度の後半以降、実質的に機能停止の状態に陥りました。

ここで協会の運営上の問題点が大きく浮上した、と思います。この協会は、今回のような案件になると、協会としての見解を簡単には出すことができません。理事長がすべてについて最終決定権を持っているわけではありませんから、まず常務理事会で協議して見解をまとめ、理事の意見を聴く機会をも設ける等の手続きが必要です。協会は同時に、その具体的運営においては、委員会の自主性を大幅に認めているので、

今回の場合だと、まずは実行委員会の自主的判断を尊重することとなるわけです。ですから、仮に別な方（たとえば永幡さん自身）が実行委員長だったなら、協会の対応は違ったものとなっていたでしょう。それはそれでよいのですが、実行委員会の見解がそのまま協会の見解にはなりません。協会の公式見解を発表するとなると、少なくとも常務理事会を開催し、実行委員会からの報告の内容を審議する必要があります。

そういう事情から、協会 ML 上で議論が燃え上がった時、協会としての迅速な対応を採ることはできませんでした。こういった協会運営の弱点は、10数年前にも大きく浮上したことがあります。この問題については、今後に向けて対応を検討する必要がありますがあると考えているところです。

今回の問題が、協会活動全体に及ぼした影響は、多大なものがありました。それにもかかわらず、20周年展を通じて、協会活動の歴史とその活動内容と意義を内外に発信できたことは、大きな成果だったと思います。委員長の船場さん、アートディレクターの鷺野宏さん（会員）はじめ20周年実行委員会の皆さまには、その労苦を労い御礼を申し上げます。またこうした貴重な機会を与えていただいた、大庭さんはじめ千葉博には心より感謝申し上げます。

当初、会期中に全国の会員とその成果を共有し、将来の協会の在り方について共に考えるために集いをもちたい、とも考えていましたが、パネル問題等への対応に追われ、その多くを実現することができませんでした。今になって考えると、理事長としてあのときこうしていれば…といった反省もいくつかあり、自分の力不足を残念かつ申し訳なく思っております。会員の皆さまはじめ関係者の方々に、多大なご苦勞・ご心配をおかけしたことについて、この場を借りて改めてお詫び申し上げます。

原発事故とサウンドスケープに関しては、永幡さんと共に検討していきたいと考え、5月になってからも彼に対話の席に戻ってくれるよう呼びかけました。しかし、この総会直前の彼の退会によって、その一縷の望みも消えてしまいました。永幡さんには、今後の協会活動を担う人物のひとりとしても、個人的に大いに期待していましたが、このような事態に至ってしまったことは大変残念です。

最後に体調不良のため、総会に出席されなかった西江雅之会長からのメッセージ（総会においてもご披露した内容）をお伝えしたいと思います。

今回、20周年展において起こった問題は、深く考察すると学ぶことが実に多くあるでしょう。そうした議論を協会内部で行うのは結構ですが、それが対外的となると注意したほうがいい。その議論が興味深く有意義なだけに、協会が基本とするテーマは「原発問題」ではなく、「サウンドスケープ」であることを忘れてはなりません…（文責：鳥越）

なにごとも「塞翁が馬」です。今回のことは、将来の協会にとって悪いことばかりともかぎりません。こうした経験を貴重なものとして、新しい年度の協会活動に生かしていきたいと考えていますので、今後とも何卒よろしくお願い致します。

以上